

大井神社

祭神 弥都波能売命(水の神)。波邇夜須毘売命(土の神) 天照大神(日の神)。宿の産土神。
初めは大井川上流の本川根町谷畑に祀られていたが島田宿の下島に遷座。慶長9年(1604)の洪水で野田に、1615年に下島に復帰。元禄2年(1689)に現在地に祭られる。それまでの大井大明神を大井神社と呼ぶようになった。
洪水を鎮め、安産の神として信仰されてきた。江戸時代に島田に嫁いできた新妻たちが安産を願って帯を奉納する習慣が生まれ、これを神輿行列の山伏行者に持たせ町内披露した事から島田の帯まつりが始まった。
島田の帯まつりは日本三奇祭の一つ。

刀匠島田顕彰碑

島田に軒を並べた刀鍛冶集団は、室町末期に始まり義助、宗助、広助が主流をなした。相州風、備前風の業物打ちで明治まで高い評価を得ていた。戦国大名今川、武田、徳川氏は高く評価。特に義助の"お手杵の槍"、宗助の"おそらく造りの短刀"は刀剣史上の秀作。連歌師宗長は義助の3男。今川氏に仕え、宗祇師宗祇と共に旅し、丸子の紫屋寺に草庵を営み85歳亡くなる。

塚本如舟宅跡碑

如舟(孫兵衛)は初代の川庄屋(川会所)で俳人でもあり島田の文化人。芭蕉の句"田植とともに旅の朝起" 如舟の句"やはらかにたけよことしの手作麦"
芭蕉は如舟宅に2度泊まっている。
元禄4年(1691)と元禄7年(1694)。最初の時、如舟が「一言の印を侍れ」と頼むと、芭蕉は"宿かりて名を名乗らすしぐれ哉" 2度目は川留めで4日滞在、このとき"さみだれの空吹きおとせ大井川"
如舟は連歌師宗長を慕い、宗長庵を営む
JR島田駅前に庵跡碑がある。



東海道遠江・駿河: 04 藤枝—島田

島田宿 藤枝から2里8町



本陣3、脇本陣0、旅籠48、問屋1。町並み9町40間。
宿は伝馬役、宿機能をもつ本町通りと渡船場機能の河原町に分けられていた。
鎌倉時代には川越のルートがあり、慶長6年(1601)の伝馬制度発足と同時に宿が設立された。
慶長9年(1604)の大洪水に遭い宿は北の現在の元島田に移転、元和元年(1615)現在地に戻った。対岸の金谷と共に川越しで栄えてきた。川留めのときは島田宿だけでは収容できず、藤枝、岡部あたりも影響を受けたという。[弥次・喜多]さんも川留めで岡部に泊まった。

[弥次・喜多] 瀬戸立場。名物、染飯なれば
"やきものゝ名にあふせとの名物は
さてこそ米もそめつけにして"



志太郡衙遺跡

志太3丁目

瀬戸染飯茶版木の標柱碑

藤枝の名物"染飯"は強飯をクチナシで染めすりつぶし、小判形に薄く干したものだ。客に出す時はその都度蒸して出す。



明治天皇小休所跡碑
常夜灯

田中藩標示石蹟
上青島

千貫堤

東海道追分

瀬戸新屋、水上は湿地が多かったの
でここから東へ、竜大山を回り前島へ
開拓が進んでから六地藏前を通る
ようになったのでここを追分といった。

鏡池堂六地藏尊

龍神の棲んでいた鏡ヶ池から出現し駿河国24番札所、9番の霊地に指定された。正徳3年支配人大草太郎左エ門が子授かるよう祈願したところ子が授かったので堂宇を寄進したという。本尊は知証大師作の六地藏、扁額は渡辺華山筆という。(掲示板)



千貫堤

この地は大井川の洪水で度々水害に見舞われた。寛永12年(1635)田中城主水野監物忠善は一貫の労銀を費やして、北の無縁寺の山裾から南の藤五郎山(今はない)を挟み、正泉寺の本宮山まで長さ360m、高さ3.6m、幅2.9mの堤防を築いた。今はその跡が僅かに残るのみ。



蓬萊橋 (島田駅から徒歩20分)

明治2年(1864)勝海舟らが旧幕臣の殖産事業の一つとして考え、旧幕臣200余人帰農。牧の原台地に開墾着手。お茶の栽培を始めた。翌年、沼津から彰義隊、失業した川越人足も加わった。彼らは生活用品買出しに島田宿に大井川を小舟で渡っていたが危険であった。そこで開拓総代が時の県令に架橋を願い出て許可され、明治12年(1879)完成した。
長さ、879.4。幅2.4m。平成9年、"世界一長い木造橋"でギネスブックに登録される。(渡橋、有料大人100円)

